

偶然と必然

2021年4月

加藤辰彦（昭和46年卒）

私は、瑞浪高校卒業以来、これまでずっと写真撮影を趣味としてきました。特に最近20年間ほどの時期に撮影したものを中心にして、昨年ネット上でのサイトをつくりました。このサイト、フィルムで撮った写真を掲載しているのでサイト名を「フィルムフォトス」としました。

<https://filmphotos.net/tzfilmphotos-j/>

このサイトのテーマは身近な風景を題材にしたもので、撮影地は埼玉県の秩父市、東京都の京浜運河と隅田川、茨城県の霞ヶ浦、岩手県の遠野市及び神奈川県の大磯海岸です。すべてフィルムカメラで撮りました。カラー、モノクロ両方ありますが、どちらかというとモノクロが多いです。

写真撮影をしていて常々思うことは、気に入る写真というものはなかなか撮れないということです。それでもたまには気に入ったいい写真が撮れます。もちろん、いい写真が撮れるのは用意周到に準備を重ねた場合に多いのですが、偶然に撮れる場合もあります。写真撮影の妙ですね。撮れても撮れなくてもどんどん撮影に行くということが大切なのでしょうね。そこで、皆さんの撮影活動の参考になればと思ひまして、ここではその両極端について、サイトに掲載した写真を例に挙げてご紹介したいと思います。

【偶然：偶然撮れた写真】

（雲と砂浜）

この写真は、2019年2月10日に京浜港で撮影した写真でテーマが「雲と砂浜」です。砂浜が雲と雲に挟まれて雲の向こう側に伸びているように見えませんか？ 結構幻想的な雰囲気があり、絵画展メンバーから「東京の真ん中の京浜港での撮影と思えない…」という賛辞を頂いたもので、個人的にも気に入った写真です。

これ、実は偶然撮れたもので、撮った時点ではこのよう



©2020TZ*Filmphotos

な写真になるとは夢にも思いませんでした。この日の早朝、中判（6×6判）超広角カメラに

モノクロフィルムを装填して朝凧（あさなぎ）の京浜港の水面を撮っていました。すると、向こう側から人が歩いてくるので、超広角レンズなので人が小さくなってしまいますが、まあいいかと思いながら記録写真的にシャッターを押しました。その時に、いい景色を撮ったという認識は全くありませんでした。

フィルムを現像し、スキャナで読み取りデジタル化してパソコンで見たときに初めてこの雲と砂浜の構図の妙に気づきました。そこで雲と砂浜がより分かりやすくなるようにフォトショップで処理を施して作品としました。

【必然：用意周到に準備を重ねて撮影した写真】

（16時36分から18時13分までの軌跡）

この写真は、2014年4月27日に茨城県の霞ヶ浦で撮影したものです。タイトルの通り16時36分から18時13分までの長時間露光で沈みゆく太陽を撮影しました。

この前年から霞ヶ浦の撮影を開始しましたが、湖周を撮影する内に、霞ヶ浦の西の空を沈みゆく太陽を撮りたい程度の漠然とした考えが浮かびました。そこで、撮影に行くたびにいろいろなアングルを考え、結果的に西の空を沈みゆく太陽を長時間露光でとらえ、太陽の軌跡を撮影することにしました。



撮影に長時間を要するので寒くない時期ということで4月以降、連休に入ると人出が増えるのでなどと諸条件を考えて5月の連休前を撮影時期としました。そこで、その時期の太陽高度と方位角からおおむねの撮影ポイントとカメラを向ける方角を決め、次にカメラ・レンズとフィルムの選定、さらにNDフィルタの選定を行い、おおむねの露光時間を1時間30分程度と設定しました。

上記のような準備をするのに約2ヵ月間を要し、その後撮影に臨みました。撮影中に、太陽に少しかけ雲がかかり、終了間際に風が出てきて波しぶきを浴びるなどの予期せぬ事象がありましたが、おおむね予定通りの撮影ができ、上記のような作品となりました。